

青年期における愛着と親以外への依存性¹

——愛着は対人関係の鋳型なのか——

岡本祐子・東山花子・池田龍也

Attachment to parents and dependency on someone other than parents in adolescence:
Does attachment really regulate interpersonal relationship?

Yuko Okamoto, Hanako Higashiyama, and Tatsuya Ikeda

In this study, we investigated the relationship between attachment to parents, dependency on someone other than parents, and independence in adolescence. The subjects were 246 undergraduate students (110 males, 131 females, and 5 unknown). Participants who answered that their dependency was on someone other than their parents were 150 (77 males, 69 females, and 4 unknown). The hierarchical multiple regression analysis indicated that the dependency on someone other than their parents affects independence. In particular, dependency on someone other than parents has a buffering effect between attachment to parents and collaborative interpersonal relationships. Our results suggest that adolescents who have unstable attachments to their parents can be adaptive in their development, if they can request psychological support or obtain a stable and secure dependency object.

キーワード : dependency, attachment, independency, collaborative interpersonal relationships, adolescent

問題および目的

青年期になると、親からの心理的離乳を行い、児童期までの親を中心とした対人関係から友人、恋人というようにより広範囲な対人関係を形成する。そしてそのような発達段階を経て自立していく。渡邊 (1990) は自立の概念化の枠組みとしては情緒的自立、行動的自立、価値的自立という3側面は欠くことが出来ないと述べた。また、自立の概念には①他者の介助、介入、支配、監督からの離脱、②自己判断、自己決定、自己統制に基づき時間的展望をもって主体的に自己自身の力でやることの2点が含まれるとし、前者を消極的自立、後者を積極的自立と示し、自律は積極的自立のひとつであるとした。一方、高坂・戸田 (2006) は行動的自立・価値的自立・情緒的自立・認知的

¹ 本稿は第二著者である東山花子 (旧姓：尾崎) の卒業論文を加筆修正したものである。本誌の投稿資格の関係で主任指導教員が筆頭著者となって公刊する。

自立の4側面から自立をとらえることが適切であるとした。行動的自立とは自らの意志で決定した行動を自分の力でいき、その結果の責任を取ることができるようになること(実行と責任)、価値的自立とは行動・思考の指針となる価値基準を明確に持ち、それにしたがって物事の善悪、行動の方針などの判断を下すことができるようになること(価値観と判断)、情緒的自立とは他者との心の交流をもつとともに、感情のコントロールができ、常に心の安定を保つことができるようになること(自己統制と適切な対人関係)、認知的自立とは現在の自分をありのままに認めるとともに、他者の行動、思考、立場および外的事象を客観的に理解・把握することができるようになること(自己認知と社会的知識・視野)である。そして青年期の心理的発達という側面に注目し、従来の自立概念とは区別した、心理的自立を「成人期において適応するために必要な心理・社会的な能力を備えた状態」と定義した。なお、心理的自立は自分の価値観に基づいて判断し、行動できる「価値判断・実行」、自分の感情をコントロールし、自分や外的事象を客観的に見ることが出来る「自己統制・客観視」、現在の自分の状態を理解し、それを基に将来を考え努力できる「現在把握・将来志向」、周囲の人と協調し他者と適切に関わることが出来る「適切な人間関係」、社会的知識や社会的における自分の役割が理解できる「社会的知識・視野」の5因子で構成される。

青年期の自立性を考える際には Bowlby (1969) が提唱した愛着理論が重要となる。彼は愛着を「ある特定の人と他の特定の人間に形成される愛情の絆である」と述べた。その上で、乳幼児期からの愛着対象(養育者)との相互作用によって形成され、愛着対象に対して期待する応答に基づく、他者に対する主観的な確信(他者モデル)と、自分自身が愛着対象に受容されているかについての自己に対する主観的な確信(自己モデル)を内的作業モデルと提起した。また、このモデルは無意識、かつ自動的に働くため、意識的に修正することは困難であり、加齢とともに安定性を増しながら不変性を獲得していくことを示唆した。そして、このモデルに基づいて人は他者の意図や状況を理解し、自らの行動プランを立てることから青年期以降における、より広範囲で複雑な対人関係を構築する基盤となると考えられている。さらに、岡(1983)は愛着と自立は一直線上の両極ではなく、たとえ青年期における心理的離乳によって幼少期の愛着の形、つまり愛着行動が見られず、自立しているように見られる場合でもその自立を支えるものには変形、変質した愛着の形があることを強調した。

数井・遠藤(2005)は従来の愛着理論研究を概観し、親への愛着形成が不安定な場合にはストレスに脆弱であり、その苦痛や不安を対人関係を通して緩和することができないという悪循環に陥ることを示唆した。そしてこのような心的弾性のなさが抑うつなどの精神病理のリスクを高めると考えた。また、丹羽(2002)は青年期の親への愛着が友人関係に及ぼす影響を検討し、愛着回避が高い場合、友人と親密な関係を持たない、持とうともしないことから友人への気遣いをしないことを示唆した。一方、愛着不安が高い場合では対人関係不安が高いため友人に対してふれあいを回避してしまうと考えた。以上より、親への愛着は生涯を通じた多くの他者との関係および個体の適応を支えるシステムとして働くと考えられており(数井・遠藤, 2005)、青年期における自立性においても重要であると考えられる。

一方、愛着と関連する概念に依存性がある。依存は自立とは対極のものであり、依存は退行的な

心性として病的に問題視されてきた(江口, 1966)。しかし、その後、高橋(1968)は依存性を「道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求である」と定義し、依存が変形または成熟した状態が自立であることを示唆した。この知見を踏まえ、関(1982)は依存性のあり方を「依存欲求」、「依存拒否」、「統合された依存」の3つの概念を用いて類型化した。「依存欲求」とは援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を他者に求める欲求である。一方で「依存拒否」とは顕在的には他者への依存を拒否する形で現れるが潜在的に依存不安があると推測される態度である。そして、「統合された依存」とは相互依存的な他者との良好な関係を保ち、そこから得た安定感を基礎として自立的になるため必要不可欠な依存性であるとした。

久米(2001)は青年期の友人関係を依存性に焦点を当てて検討し、象徴化された形で心の支えとなる友人を持つことが自己の安定性に関わることを、そして「依存欲求」は特に否定的な意味を持たないことを明らかにした。同様に竹澤・小玉(2004)は対人依存欲求が高いほど自己信頼感、他者信頼感が高いことを明らかにし、依存の肯定的、適応的特徴を示した。また、加藤・高木(1980)は親への依存性と独立性がともに上昇する傾向があることを見出した。このように依存は今や自立や他者との互恵的な関係においても必要なものであると考えられている。そして、依存対象のような重要他者との関係性は個人の情緒的発達、および精神的健康に影響を及ぼし(井梅・平井・青木・馬場, 2006)、青年期では依存対象が親(養育者)から友人、恋人へと変化する移行期である(田宮・岡本, 2013)ことから、青年期における自立性には依存性、特に親以外の他者への依存性が関連していると考えられる。

以上より、青年期の自立性には親への愛着および他者への依存性が重要な基盤となると考えられるが、それらがどのように関連しあい、青年の自立に起因するかについては未だ明らかになっていない。そこで本研究では親への愛着、他者への依存性、および自立性との関連を検討することを目的とする。これを明らかにすることによって、親への愛着が不安定な場合に、他者とのどのような関わり方が適応的に発達していくために必要かという臨床的意義を示すことができると考えられる。なお、本研究における他者への依存性とは親以外の他者(友人、恋人等)への依存性とする。

方 法

対象者 国立A大学の大学生246名(男性110名、女性131名、不明5名)を分析対象者とした。平均年齢は20.34歳、 $SD = 1.07$ であった。また、依存対象を親以外(友人、恋人等)と回答した150名(男性77名、女性69名、不明4名)を抽出した。平均年齢は20.40歳、 $SD = 1.06$ であった。一方、親と回答した者96名(男性33名、女性62名、不明1名)は平均年齢20.26歳、 $SD = 1.09$ であった。

手続き 無記名自記式の質問紙調査を集合法によって実施した。調査にあたり、調査協力は自由意志に基づくものであり強制ではないこと、調査へ協力しないことによって不利益が生じないこと等を教示した。

質問紙の構成 ①親に対する愛着の測定 親への愛着尺度(丹波, 2002)を使用した。全17項目から構成され、下位尺度に「愛着不安」8項目と「愛着回避」9項目を持つ。5件法で測定した。

②依存性の測定 依存性尺度 (関, 1982) を用いた。全 39 項目から構成され、5 件法によって測定された。下位尺度に、「依存欲求」「統合された依存」「依存拒否」各 13 項目を持つ。なお、本研究の目的上、誰に依存性を向けているのかを明確にする必要があったため、各項目の「誰か」という部分を「A さん」に置き換え、意味内容が原版と大きく変わらないように各項目の文言を改変した。項目の改変には臨床心理士 2 名が関わり、了解が得られたものを用いた。まず、依存の対象者を限定するために「あなたの心の支えとなる人を 1 名思い浮かべてください」と教示し、その人物と自身との関係を友人、恋人、母親、父親、その他の 5 つの選択肢で尋ねた。その他の場合は自身と想定した人物との関係を記述するよう求めた。そして想定した人物を A さんとし、質問項目に回答するよう教示した。③心的な自立性の測定 心理的自立尺度 (高坂・戸田, 2006) を使用した。全 29 項目から構成され、7 件法によって実施された。下位尺度に「価値判断・実行」7 項目、「自己統制・客観視」7 項目、「現在把握・将来志向」5 項目、「適切な人間関係」5 項目、「社会的知識・視野」5 項目を持つ。④フェイス項目 性別、年齢、学年を尋ねた。

分析手順 まず分析対象者全員における、各尺度得点の記述統計量と信頼性係数を算出した。次に分析対象者を、依存対象として親を選択したか否かによって分類し、各群の記述統計量を算出した。そして全対象者・親を依存対象とした群・親以外を依存対象とした群それぞれで、使用した各尺度の相関行列を作成した。最後に親以外を依存対象とした群において、自立性およびその下位尺度を目的変数、親への愛着・依存性・交互作用項を説明変数とする階層的重回帰分析を強制投入法により実施した。交互作用項が有意であった場合、依存性を調整変数と仮定した単純傾斜の検定が実施された。なお、階層的重回帰分析に投入された変数は、全てあらかじめ中心化されたものが用いられた。

結 果

記述統計量 まず、分析対象者全員における、親への愛着尺度、依存性尺度および心理的自立尺度の下位因子ごとの信頼性係数、平均値、標準偏差、最小値、最大値を算出した (Table 1)。次に対象者を、依存対象を親と回答した者 96 名 (男性 33 名、女性 62 名、不明 1 名) および親以外 (友人、恋人、兄弟、恩師、祖父母) と回答した者 150 名 (男性 77 名、女性 69 名、不明 4 名) に分類し、それぞれの平均値、標準偏差、最小値、最大値を算出した (Table 2)。

相関分析 次に親への愛着尺度、依存性尺度および心理的自立尺度の下位因子の相関分析を行った。その結果を Table 3~5 に示した。なお、Table 3 は分析対象者全体、Table 4 は依存対象を親と回答した者、Table 5 は親以外と回答した者をそれぞれ抽出した相関分析の結果を示した。

依存対象を親以外と回答した者を抽出した相関分析の結果、各尺度の下位因子間の相関は、親への愛着尺度の下位因子間で正の相関、依存性尺度の下位因子間では「統合された依存」は「依存欲求」と正の相関、「依存拒否」と負の相関を示した。また、心理的自立尺度の下位因子間ではすべて正の相関を示した。各尺度間の相関では親への愛着尺度と依存性尺度間において、「愛着不安」は「依存欲求」および「依存拒否」と正の相関を示した。また、「愛着回避」は「依存欲求」および「統合された依存」と負の相関を示し、「依存拒否」とは正の相関を示した。親への愛着尺度と心理的自立

Table 1
各尺度の下位因子における記述統計量(全回答者)

	<i>a</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>Min</i>	<i>Max</i>
愛着不安	.87	14.24	5.39	8	40
愛着回避	.88	22.09	6.78	9	44
依存欲求	.87	40.34	9.62	17	64
統合された依存	.75	49.50	8.08	30	88
依存拒否	.88	28.69	8.66	13	59
価値判断	.86	33.17	5.68	12	46
自己統制	.82	31.67	6.03	17	78
現在把握	.78	25.34	4.88	6	35
適切な人間関係	.85	24.57	4.92	5	35
社会的知識	.77	19.88	4.91	5	31
自立全体	.90	134.63	20.14	63	184

Table 2
各尺度の記述統計量(親および親以外回答者)

	<i>M</i>		<i>SD</i>		<i>Min</i>		<i>Max</i>	
	親	親以外	親	親以外	親	親以外	親	親以外
愛着不安	12.77	15.18	4.52	5.70	8	8	27	40
愛着回避	18.50	24.39	5.02	6.77	9	9	34	44
依存欲求	39.89	40.63	9.29	9.85	17	21	61	64
統合された依存	50.89	48.61	7.19	8.51	35	30	65	88
依存拒否	27.08	29.71	8.96	8.33	13	13	56	59
価値判断	32.67	33.49	5.89	5.54	16	12	43	46
自己統制	31.29	31.91	5.13	6.55	17	18	44	78
現在把握	25.81	25.03	4.74	4.95	13	6	35	35
適切な人間関係	24.93	24.34	4.70	5.06	11	5	35	35
社会的知識	19.83	19.91	4.58	5.13	9	5	31	30
自立全体	134.53	134.35	20.09	20.10	79	63	180	184

尺度間においては「愛着不安」は「価値判断」「適切な人間関係」および心理的自立尺度全体と負の相関を示した。そして依存性尺度と心理的自立尺度間では「依存欲求」は「価値判断」と負の相関を示し、「統合された依存」は「現在把握」, 「適切な人間関係」および心理的自立尺度全体と正の相関を示した。「依存拒否」は「自己統制」と正の相関を示した。

階層的重回帰分析 親への愛着, 他者への依存性, および自立性との関連を検討するため親への愛着尺度と依存性尺度の各下位因子を独立変数, 心理的自立尺度を従属変数とする階層的重回帰分析を行った。第1ステップに親への愛着尺度の各下位因子, 第2ステップにはそれらに加え, 依存性尺度の各下位因子を変数として投入した。第3ステップには親への愛着尺度×依存性尺度の各下位因子の交互作用項を投入した。 R^2 の変化量を示す ΔR^2 が有意であったため($\Delta R^2 = .09, F(11, 138) = 4.74, p < .01$), 交互作用を仮定する第3ステップが採用された($R^2 = .27, p < .01$)。第3ステップにおいて, 「愛着不安」は負の影響を($\beta = -.42, p < .01$), 「統合された依存」は正の影響を, それぞれ独

Table 3

親への愛着、依存性、心理的自立の各下位因子得点の全変数の相関 (全回答者)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 愛着不安	—									
2 愛着回避	.42 **	—								
3 依存欲求	.10	-.31 **	—							
4 統合された依存	-.21 **	-.44 **	.60 **	—						
5 依存拒否	.53 **	.47 **	-.07	-.37 **	—					
6 価値判断	-.13 *	.07	-.16 *	.09	.01	—				
7 自己統制	-.11 †	.06	-.07	.06	.13 *	.47 **	—			
8 現在把握	-.19 **	-.16 *	.05	.32 **	-.10	.60 **	.39 **	—		
9 適切な人間関係	-.29 **	-.13 *	.12 †	.38 **	-.13 *	.41 **	.36 **	.56 **	—	
10 社会的知識	-.04	.05	.05	.14 *	.08	.49 **	.43 **	.58 **	.50 **	—
11 自立全体	-.20 **	-.02	-.01	.25 **	.01	.79 **	.72 **	.81 **	.73 **	.78 **

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 4

親への愛着、依存性、心理的自立の各下位因子得点の全変数の相関 (親回答者)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 愛着不安	—									
2 愛着回避	.40 **	—								
3 依存欲求	-.06	-.45 **	—							
4 統合された依存	-.49 **	-.59 **	.57 **	—						
5 依存拒否	.51 **	.64 **	-.20 *	-.56 **	—					
6 価値判断	-.10	.08	-.21 *	.13	-.01	—				
7 自己統制	-.27 **	.03	-.20 †	.06	.00	.59 **	—			
8 現在把握	-.30 **	-.24 *	-.02	.30 **	-.20 †	.63 **	.61 **	—		
9 適切な人間関係	-.35 **	-.25 *	.21 *	.49 **	-.28 **	.42 **	.46 **	.67 **	—	
10 社会的知識	-.11	-.09	.19 †	.19 †	.01	.54 **	.52 **	.60 **	.50 **	—
11 自立全体	-.27 **	-.10	-.03	.28 **	-.11	.82 **	.80 **	.87 **	.75 **	.78 **

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 5

親への愛着、依存性、心理的自立の各下位因子得点の全変数の相関 (親以外回答者)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 愛着不安	—									
2 愛着回避	.36 **	—								
3 依存欲求	.17 *	-.32 **	—							
4 統合された依存	-.05	-.35 **	.63 **	—						
5 依存拒否	.52 **	.38 **	.00	-.24 **	—					
6 価値判断	-.18 *	.02	-.14 †	.08	.00	—				
7 自己統制	-.07	.05	-.01	.07	.20 *	.41 **	—			
8 現在把握	-.12	-.09	.10	.32 **	-.02	.59 **	.29 **	—		
9 適切な人間関係	-.25 **	-.06	.08	.32 **	-.02	.41 **	.32 **	.50 **	—	
10 社会的知識	-.02	.11	-.02	.13	.13	.47 **	.39 **	.58 **	.51 **	—
11 自立全体	-.17 *	.01	.00	.23 **	.09	.77 **	.69 **	.77 **	.72 **	.78 **

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

立して及ぼすことが示された ($\beta = .32, p < .01$)。

また、「愛着回避」×「依存欲求」、「愛着回避」×「依存拒否」の交互作用が有意な結果を示したことから、「依存欲求」「依存拒否」をそれぞれ調整変数とする「愛着回避」の単純傾斜の検定を行った。その結果、「依存欲求」が高い場合と低い場合のどちらも「愛着回避」の単純傾斜は有意ではなかった。一方で「依存拒否」が低い場合、「愛着回避」の単純傾斜は有意で正の影響を示し ($\beta = .25, p < .05$)、「依存拒否」が高い場合には有意ではなかった ($\beta = -.16, p = .22$)。このことから、「依存拒否」が低い場合に「愛着回避」は自立全体を高めることが示された。階層的重回帰分析の結果を Table 6、単純傾斜の結果を Figure 1、2 に示した。

Table 6
心理的自立尺度全体を目的変数とした階層的重回帰分析

	β			
	step1	step2	step3	
愛着不安	-.20 *	-.32 **	-.42 **	
愛着回避	.07	.08	.04	
依存欲求		-.21 *	-.05	
統合された依存		.45 **	.32 **	
依存拒否		.32 **	.26 **	
愛着不安×依存欲求			.13	
愛着不安×統合された依存			.11	
愛着不安×依存拒否			.05	
愛着回避×依存欲求			.17 †	
愛着回避×統合された依存			-.14	
愛着回避×依存拒否			-.22 *	
	R^2	.04 †	.19 **	.27 **
	ΔR^2		.15	.08 *

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

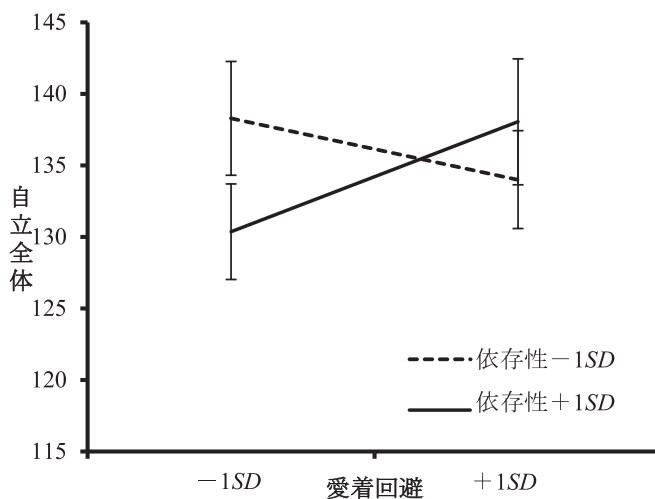


Figure 1. 愛着回避×依存欲求における単純傾斜の検定

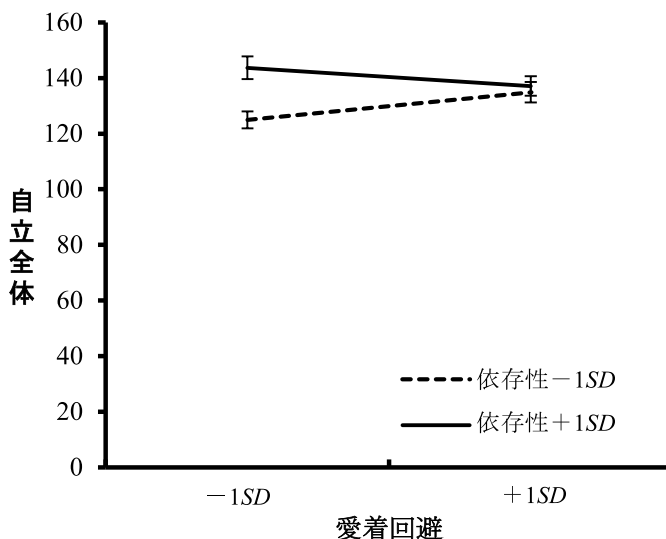


Figure 2. 愛着回避×依存拒否における単純傾斜の検定

自立の各下位因子の検討 自立のどの側面に対して親への愛着、および他者への依存性が関連するのかをより詳細に検討するため、心理的自立尺度の各下位因子を目的変数とする階層的重回帰分析を行った（強制投入法）。その結果、 ΔR^2 より「適切な人間関係」を除く各下位因子では第2ステップが採用された。第2ステップを採用した階層的重回帰分析の結果を Table 7~10 に示す。

「価値判断」を目的変数とした階層的重回帰分析では ΔR^2 が有意であったため ($\Delta R^2 = .06, F(5, 144) = 3.36, p < .05$)、第2ステップを採用した ($R^2 = .10, p < .01$) (Table 7)。その結果、「愛着不安」は「価値判断」に弱い有意な負の影響 ($\beta = -.24, p < .05$)、「依存欲求」においても弱い有意な負の影響を示した ($\beta = -.26, p < .05$)。「統合された依存」は正の影響 ($\beta = .30, p < .01$)、「依存拒否」は弱い正の有意傾向を示した ($\beta = .17, p < .10$)。

「自己統制」を目的変数とした階層的重回帰分析では ΔR^2 が有意であったため ($\Delta R^2 = .09, F(5, 144) = 3.34, p < .01$)、第2ステップを採用した ($R^2 = .10, p < .01$) (Table 8)。その結果、「愛着不安」は「自己統制」に弱い有意な負の影響を示した ($\beta = -.25, p < .05$)。「統合された依存」は有意傾向の正の影響を示し ($\beta = .21, p < .10$)、「依存拒否」は有意な正の影響を示した ($\beta = .36, p < .01$)。

「現在把握」を目的変数とした階層的重回帰分析では ΔR^2 が有意であったため ($\Delta R^2 = .13, F(5, 144) = 4.95, p < .01$)、第2ステップを採用した ($R^2 = .15, p < .01$) (Table 9)。その結果、「愛着不安」は「現在把握」に負の有意傾向を示した ($\beta = -.17, p < .10$)。「統合された依存」は有意な正の影響を示した ($\beta = .46, p < .01$)。また、「依存拒否」は正の有意傾向を示した ($\beta = .18, p < .10$)。

「社会的知識」を目的変数とした階層的重回帰分析では ΔR^2 が有意であったため ($\Delta R^2 = .08, F(5, 144) = 4.95, p < .01$)、第2ステップを採用した ($R^2 = .10, p < .05$) (Table 10)。その結果、「統合された依存」は有意な正の影響 ($\beta = .33, p < .01$)、「依存拒否」は「社会的知識」に弱い有意な正の影響

を

Table 7
価値判断を目的変数とした階層的重回帰分析

	β		
	step1	step2	step3
愛着不安	-.22 *	-.24 *	-.27 *
愛着回避	.10	.06	.04
依存欲求		-.26 *	-.24 †
統合された依存		.30 **	.27 *
依存拒否		.17 †	.14
愛着不安×依存欲求			.11
愛着不安×統合された依存			.04
愛着不安×依存拒否			.02
愛着回避×依存欲求			-.02
愛着回避×統合された依存			-.06
愛着回避×依存拒否			.00
R^2	.04 *	.10 **	.12 †
ΔR^2		.06 *	.01

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 8
自己統制を目的変数とした階層的重回帰分析

	β		
	step1	step2	step3
愛着不安	-.10	-.25 *	-.36 **
愛着回避	.09	.05	.05
依存欲求		-.08	.06
統合された依存		.21 †	.11
依存拒否		.36 **	.32 **
愛着不安×依存欲求			.10
愛着不安×統合された依存			.04
愛着不安×依存拒否			.07
愛着回避×依存欲求			.14
愛着回避×統合された依存			-.03
愛着回避×依存拒否			-.14
R^2	.01	.10 **	.16 *
ΔR^2		.09 **	.05

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

示した ($\beta = .24$, $p < .05$)。

「適切な人間関係」を目的変数とした階層的重回帰分析では、 ΔR^2 が有意であったため ($\Delta R^2 = .11$, $F(11, 138) = 6.40$, $p < .01$)、交互作用を仮定する第3ステップを採用した ($R^2 = .34$, $p < .01$)。その結

Table 9
現在把握を目的変数とした階層的重回帰分析

	β		
	step1	step2	step3
愛着不安	-.10	-.17 †	-.28 *
愛着回避	-.05	.01	.00
依存欲求		-.15	-.02
統合された依存		.46 **	.35 **
依存拒否		.18 †	.13
愛着不安×依存欲求			.12
愛着不安×統合された依存			.08
愛着不安×依存拒否			.04
愛着回避×依存欲求			.16
愛着回避×統合された依存			-.08
愛着回避×依存拒否			-.13
R^2	.02	.15 **	.21 **
ΔR^2		.13 **	.06

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 10
社会的知識を目的変数とした階層的重回帰分析

	β		
	step1	step2	step3
愛着不安	-.07	-.15	-.24 †
愛着回避	.14	.14	.12
依存欲求		-.15	.00
統合された依存		.33 **	.21 †
依存拒否		.24 *	.21 *
愛着不安×依存欲求			.11
愛着不安×統合された依存			.05
愛着不安×依存拒否			.01
愛着回避×依存欲求			.15
愛着回避×統合された依存			-.07
愛着回避×依存拒否			-.22 *
R^2	.02 **	.10 *	.17 **
ΔR^2		.08 **	.07 †

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

果、「愛着不安」は「適切な人間関係」に有意な負の影響を示した ($\beta = -.41, p < .01$)。「統合された依存」は有意な正の影響を示し ($\beta = .35, p < .01$)、「依存拒否」は正の有意傾向を示した ($\beta = .19, p < .10$)。また有意な交互作用が認められたため、「依存欲求」「統合された依存」「依存拒否」をそれぞれ調整変数とする単純傾斜の検定を実施した。階層的重回帰分析の結果を Table 11, 単純傾斜の

検定の結果を Figure 3~6 に示した。

まず、「愛着不安」×「統合された依存」の単純傾斜の検定では、「統合された依存」が低い場合、「愛着不安」の単純傾斜は負の有意な影響を示した ($\beta = -.61, p < .01$)。一方で「統合された依存」が高い場合の「愛着不安」の単純傾斜は有意ではなかった ($\beta = -.22, p = .18$)。次に、「愛着回避」×「依存欲求」の単純傾斜の検定の結果では、「依存欲求」が低い場合には「愛着回避」の単純傾斜は有意ではなかったが ($\beta = .15, p = .20$)、「依存欲求」が高い場合の「愛着回避」の単純傾斜は弱い正の有意傾向を示した ($\beta = .23, p = .07$)。また、「愛着回避」×「統合された依存」における単純傾斜の検定では、「統合された依存」が低い場合、「愛着回避」の単純傾斜は弱い正の有意傾向を示した ($\beta = .24, p = .06$)。しかし、「統合された依存」が高い場合には「愛着回避」の単純傾斜は有意ではなかった ($\beta = .16, p = .31$)。最後に、「愛着回避」×「依存拒否」の単純傾斜の検定の結果では、「依存拒否」が低い場合、「愛着回避」の単純傾斜は弱い有意な正の影響を示し ($\beta = .30, p < .01$)、「依存拒否」が高い場合には弱い負の有意傾向を示した ($\beta = -.21, p = .10$)。

考 察

親への愛着、他者への依存性、自立性の関連 自立には「愛着不安」と他者への「統合された依存」が単独で影響を及ぼすことが示されたが、「愛着不安」の負の影響の方が「統合された依存」の正の影響より相対的に大きい。このことから、青年の自立には他者への依存性より親への愛着がより大きく関連することが示唆された。これは幼少期に形成された養育者との愛着が生涯を通じた多くの他者との関係および個体の適応を支えるシステムとして働くと考えられている (数井・遠藤, 2005) ことから愛着の重要性を主張する従来の愛着理論研究を支持する結果であると考えられる。

Table 11
適切な人間関係を目的変数とした階層的重回帰分析

	β		
	step1	step2	step3
愛着不安	-.26 **	-.37 **	-.41 **
愛着回避	.03	.11	.04
依存欲求		-.12	.04
統合された依存		.48 **	.35 **
依存拒否		.25 **	.19 †
愛着不安×依存欲求			.03
愛着不安×統合された依存			.20 †
愛着不安×依存拒否			-.01
愛着回避×依存欲求			.21 *
愛着回避×統合された依存			-.19 †
愛着回避×依存拒否			-.27 **
R^2	.06 **	.23 **	.34 **
ΔR^2		.16 **	.11 **

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

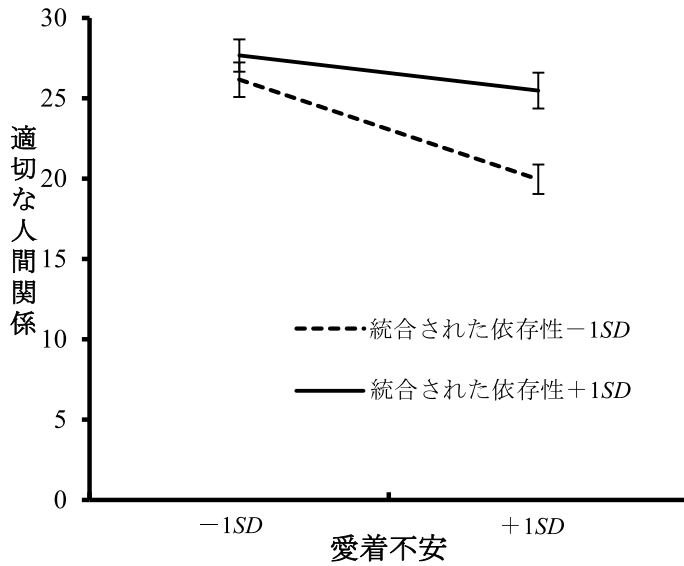


Figure 3. 愛着不安×統合された依存性における単純傾斜の検定

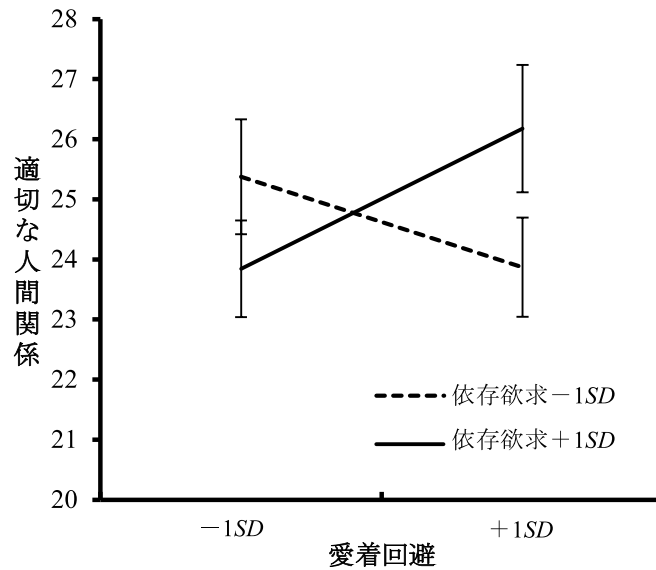


Figure 4. 愛着回避×依存欲求における単純傾斜の検定

また、関 (1982) は成熟した依存性の発達には他者に頼らなければ生きていけない幼少期に、養育者に絶対的依存を受けられるという体験を持つことが一種の安定感を作り上げ、得られた安定感が内在化することで個人の心理的発達を支えるという背景があると述べた。「愛着不安」が高いと

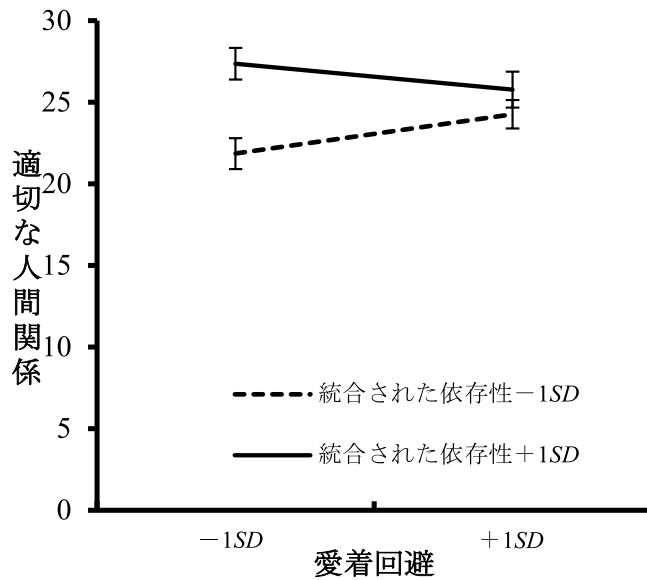


Figure 5. 愛着回避×統合された依存性における単純傾斜の検定

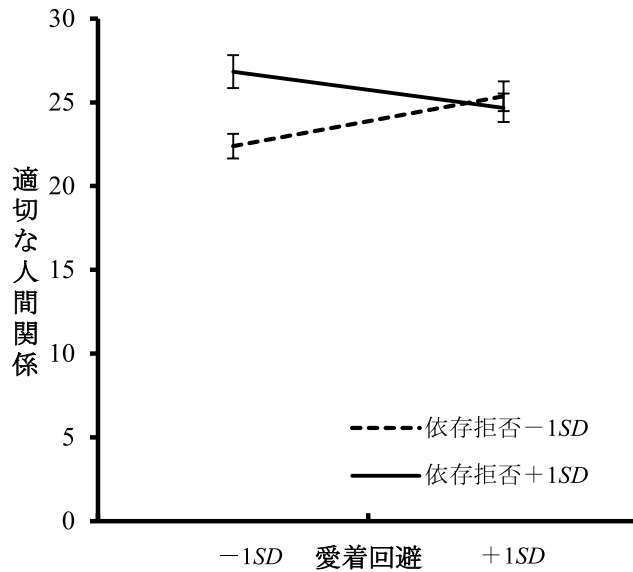


Figure 6. 愛着回避×依存拒否における単純傾斜の検定

は親との関係性に安定感を見出すことが出来ていないと考えられるため、親以外の他者との間にも安定感を内在化することが出来ず、他者への依存性そのものが発達しにくいと考えられる。

しかし、交互作用を検討すると、「愛着回避」が高い場合、「依存拒否」が低ければ自立を高めることが示唆された。「愛着回避」が高いとは親に助言や助けを求めない、相談したくないといった親

との関係性を回避し、親への愛着が不安定な場合であると考えられる。そして「愛着回避」が高い人は友人と親密な関係を持たない、持とうともしないと考えられていたが(丹羽, 2002), この結果からは親への愛着が不安定な場合であっても親以外の特定の他者に頼ることを自身が受け入れることが親との愛着の不安定さに緩衝効果を与えると考えられる。つまり、親との愛着が不安定な場合には対人関係も不安定だと考えられていたが、むしろ青年期において重要となる特定の他者と関わることで自身の心理的発達を支えている青年もいると思われる。このことから、青年期における親以外の他者の働きは大きいと考えられる。

なお、「依存拒否」は他者への依存を拒否し、依存不安があると推測される未熟な依存形態とされる(関, 1983)。しかし、自立には他者の介助・介入・支配・監督からの離脱である消極的自立という概念が含まれている(渡邊, 1990)ことから、自立の各下位因子すべてに正の影響を及ぼしたと思われる。特に男性の場合には、人に頼らない、依存しないことを是とする社会的背景があるため依存性そのものを意識しにくい(長尾・笠井・鈴木, 2003)ことも結果に影響をおよぼしていると考えられる。

適切な人間関係との関連 「愛着不安」×「統合された依存」, 「愛着回避」×「統合された依存」の交互作用より、「統合された依存」は「愛着回避」および「愛着不安」の双方の調整変数となる唯一の依存形態であることが示された。また、それぞれの単純傾斜の結果を比較すると、同じ「統合された依存」が低い場合でも、「愛着不安」は「適切な人間関係」に負の影響、「愛着回避」は正の影響を及ぼした。それぞれの β 係数は -0.61 ($p < .01$) と 0.24 ($p < .10$) であるため、「統合された依存」が低い場合には「愛着回避」より「愛着不安」の方が適切な人間関係におよぼす影響が相対的に大きい。よって、「統合された依存」が低い場合、親への愛着が適切な対人関係の構築に影響しやすいと言えるだろう。逆に、「統合された依存」が高い場合、親への愛着が適切な人間関係におよぼす影響は小さいとも考えられる。つまり、「統合された依存」は青年の対人関係を支える要素の1つであると考えられ、親への愛着が適切な人間関係におよぼす影響に緩衝効果を与えることが示唆された。「愛着不安」が高い人は先述したように親との関係性に安定感を見出すことが出来ていないと考えられる。そして親への「愛着不安」が高い場合、対人関係不安が高いため友人に対してふれあいを回避してしまうと考えられた(丹羽, 2002)。しかし、一人であれ、複数であれ、特定の他者に「いつでも頼ることが出来る」という信頼や「自分には心の支えとなる人がいる」という実感を得ることが出来ると、親への愛着が不安定な場合であっても周囲の人と協調しながら心の交流をもつことができ、周囲の人間関係に適応していくと考えられる。象徴化された形で心の支えとなる友人を持つことが自己の安定性に関わる(久米, 2001)ことや、「肯定的に受け入れてくれる友人」が近くにいることが日常生活を肯定的・積極的に過ごす上で重要である(丹野, 2008)ことから青年期における自立、特に対人関係を構築するためには親子関係だけでなく他者への依存性が大きな役割を果たすと考えられる。

総合考察 従来、親との愛着関係は対人関係や適応を規定する重要な概念であると考えられてきた。親への愛着、他者への依存性および自立性との関連を検討した本研究の結果もその考えを一部支持している。しかし、階層的重回帰分析において複数の有意な交互作用項が認められた点から、

青年期の自立性，特に対人関係を検討する場合，親への愛着のみでは不十分であり，親以外の他者への依存性を考慮すべきであることが示唆された。他者への依存性，とりわけ「統合された依存」の働きは特筆に値する。なぜなら，青年期において友人，恋人といった重要他者となりうる者に精神的助力を求めることができ，「私には心の支えとなる人がいる」というような常に安定した信頼たる依存性を構築すること，そしてそのような依存を示すことのできる他者の存在が，幼少期の虐待や愛着対象の喪失といった，何らかの要因によって親への愛着に不安定さを抱える青年が適応的に発達していくためのサポート要因となりうることが推察されるためである。

今後の課題 本研究では大学生を対象とした調査であった。大学生は多くの者が親元を離れ，親という存在，および親との愛着を意識する場面が少ないと考えられる。そのため，質問紙回答の際に，親に対して回避すると回答したことが一概に不安定な愛着関係であるということではできないだろう。また，先行研究より，親との愛着は特に女性と母親との間で強固に続いていくと考えられ，男性の場合は親に頼るということから早期に離脱すると考えられる。よって，今後は中学生や高校生など多様な時期の者を対象とし，さらに性差についてもより詳細に検討するとよいだろう。

引用文献

Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss vol.1: Attachment*. New York: Basic Books.

(ボウルビィ, J. 黒田洋子・岡田実郎・吉田恒子 (訳) (1981) 母子関係の理論 I ——愛着行動 —— 岩崎学術出版社)

江口恵子 (1966). 依存性の研究 教育心理学研究, 4, 45-58.

井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子 (2006). 日本における青年期用対象関係尺度の開発 パーソナリティ研究, 14, 181-193.

数井みゆき・遠藤利彦 (2005). アタッチメント——生涯にわたる絆—— ミネルヴァ書房

加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.

高坂康雅・戸田弘二 (2006). 青年期における心理的自立 (II) ——心理的自立尺度の作成—— 北海道教育大学紀要教育科学編, 56, 17-30.

久米禎子 (2001). 依存のあり方を通してみた青年期の友人関係——自己の安定性との関連から—— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 488-499.

長尾あゆみ・笠井仁・鈴木伸一 (2003). 青年期の親子関係と友人への依存性に関する研究 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 2, 22-34.

丹羽智美 (2002). 青年期における親への愛着が友人関係に及ぼす——影響環境移行期に着目して —— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 49, 135-143.

岡 宏子 (1983). 愛着と自立の交錯 小林 登 (編). 愛着と自立——親と子のあいだ—— (pp.119-174) 金子書房.

関 智恵子 (1982). 人格適応面から見た依存性の研究——自己像との関連において—— 京都大学教育学部心理教育相談室臨床心理事例研究, 9, 230-249.

- 高橋恵子 (1968). 依存性の発達研究 I ——大学生女子の依存性——教育心理学研究, 16, 7-16.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, 52, 310-319.
- 田宮沙紀・岡本祐子 (2013). 青年期における依存性様態の検討——依存対象に焦点を当てて——
広島大学心理学研究紀要, 13, 129-149.
- 丹野宏昭 (2008). 大学生の内的適応に果たす友人関係機能 青年心理学研究, 20, 55-69.
- 渡邊恵子 (1990). 自立の概念化の試み 日本女子大学紀要 (人間社会学部), 1, 189-200.